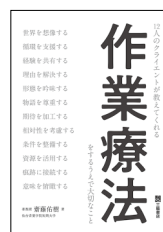


齋藤佑樹（著）

12人のクライアントが教えてくれる 作業療法をするうえで大切なこと

田 島 明 子

（聖隷クリストファー大学、作業療法士）



本書には、著者や同僚によるクライアントとの相互交流の経験の中から、作業療法をするうえで大切な視点が描かれている。12の物語があり、それらに登場するクライアントは特別な背景をもつ人ではなく、おそらく多くのOTがクライアントとして身近に感じる人々たちであると思う。ただ、12の物語の中で展開される作業療法には、臨床の難しさの中で後退しがちではあるが最も大事な点が一貫した基調となる音楽として流れていると感じる。それは「クライアントの主観的世界に常に関心をもち続け、寄り添い続ける」ことである。

それぞれの物語は著者の表現力の妙で、リアリティとわかりやすさを兼ね備えているが、複層的な円環を成し、クライアントの主観的世界への寄り添いを中心として、障害受容、家族やセラピストとの関係性、役割、居場所、同・多職種連携、機関を超えた職業イメージの影響、作業の捉え方等をトピックとし、広がりをもちつつ独創的かつ実現可能な作業療法の実践のあり様として示されている。

物語の登場人物は、障害のあることで身近な人たちの関係性において自分を肯定的に捉えることが難しくなった人々たちであるが、著

者による作業療法がどのような変容を導いたか、評者が印象に残った物語を紹介したい。

「6 物語を尊重する」の主人公であるイチロウさんは軽度の右片麻痺と認知症のある男性だが、「大地主で会社を引退した後も毎日忙しい」、「長年会社の社長をしていたため、今でも部下に慕われている」と本人は言う。そこで著者は「以前のように皆に慕われ頼られる生活を送れるよう支援する」と妻に伝えた。ところが妻からの返事は「その話……全部デタラメです……」と、そのとき著者が見いだした支援のあり方は、本人の尊厳ある生活を支えることが作業療法の役目なのだから、主観的世界や内的に組織された物語を大事にし、むしろ現実とのギャップの埋め合わせを考えるべき、だった。そして、クライアントが前向きな物語を生かされるようにサポートするために、ご家族の外的期待のほうを軌道修正したのだった。つまり、クライアントの“ありたい姿”をご家族に大事にもらえるように日常の関係性を作業的観点から組み替えたのだった。

12の物語では、作業的観点から、障害受容といわれる状態にどうしたら近づけることができるか

（2章）、ある作業が連鎖して他の作業に与える影響について（5章、9章）、クライアントの主観的世界を共有し、意思決定に向けた支援をできることが同・多職種連携のカギとなること（4章、10章）、作業の意味は動的で階層的であるからこそ、OTはクライアントがパートナーとして心の中を見せられるようにかかわりを誠実・丁寧にする必要があること（12章）等にも言及している。

「どんなに技術が発展しても、エビデンスが確立されても、クライアントにとって最適な手段を選択することができるか否か、（中略）セラピストとクライアントとの相互交流の内容に依存する（中略）相互交流の中で選択・調整されるモザイク状の実践要素を科学していくことは、作業療法の発展にとって大切な課題の一つであり、本書がその問題提起の一助」（p102）とある。まさに本書は論文等で言語化されづらい主観的世界が言語化されており、色彩感の豊かな作業療法の世界が表現されている。

〔 A5判 110頁 2,000円＋税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357 〕